

# グロテスク～ Aゴシックすごい

GE Gravenによる



## 第5章



ガーディアン修道院 ～ 1347年8月

トンネルの松明はとっくに消えていたが、1本だけは傾いていた。

壁に取り付けられたブラケットから、ラザロの趣のある地下墓地の入り口を照らしていた。明るい光の中で、イワンは大きな体を戸口に押し付け、手紙をじっと見つめていた。部屋の中では、ラザルスがベッドの端に腰掛け、木製の器から飲み物を飲んでいた。

ラザロは一口食べるごとに尋ねた。「修道士さん、あなたは何を読んでいるのですか？」

「サルヴィティーノ修道士に明日手紙を送ります」とイワンは手紙に目を落としたまま答えた。

"彼は誰ですか？"

「かつて、下級評議会の修道士がここ修道院に住んでいた。君が生まれるずっと前にね。」

「彼は今どこにいるのか？」

「イタリアのカンチェッロにある、もう一つの評議会修道院です。」

「なぜ彼に手紙を書くのですか？」

「彼は私に恩義がある。それに、私たちがイタリアへ出発したら、ちょっとしたことで手伝ってくれるだろう。」

「イタリア？でも、ブルゴーニュはどうなんだ？」

「まずはイタリアだ。」

「オディノ修道士は、まだ私たちと一緒に来てくれるんですね？」

僧侶はうなずいて肯定した。「彼は同意しました。」

「このサルヴィティノ修道士は、あなたにどのような恩義があるのですか？」

イワンは一瞬、ページから視線を外した。「もう十分だ、ラザルス。食べる。」

ラザロはもう一口食べて軽く嚙んでからイワンの方を向いた。「あなたが留守の間、一人の男がここに連れてこられ、独房に閉じ込められているのを見ました。修道士よ、彼は何をしたのですか？」

「囚人は異端の罪で裁判にかけられる。彼は明日の朝連行されるだろう。」

「彼は何をしたんだ？」

「ラザロ、彼は君の邪魔にはならない。食べなさい。もう遅い。」

ラザロは手紙に没頭しているイワンをちらりと見た。彼は自分の皿から肉とパンを少しつまみ出し、ベッドの下に放り投げると、再び食べ始めた。

「もしかしたらお腹が空いているのかもしれませんがね」とラザロは言った。

イワンは咳払いをして手紙を折りたたみ直し、服の下に滑り込ませた。「食事を終えなさい、息子よ。お前を彼のそばに近づけたくない。私を呼んだのか？」

「はい、修道士様。」イワンはボウルの中を覗き込み、ラザロが最後のパンをマスクの口元の下に滑り込ませるまで、一口一口をじっと見守った。満足げな笑みを浮かべ、イワンは空になったボウルを手を取った。

ラザロはベッドの掛け布団の下に潜り込んだ。

イワンは彼を寝かしつけた。「お祈りは？」

「はい、修道士様。そして、囚人のために祈りました。」

「素晴らしい。では、明日の朝にお会いしましょう。おやすみなさい。」

「こんばんは、修道士様。」

イワンは足取りも緩めずに部屋を出て、壁から戸口の松明を外し、地下墓地から出て行った。

毛布の山越しに覗き込みながら、ラザロはイワンの松明の光が廊下を漂うにつれて、戸口の面影が消えていくのを見ていた。それから、イワンがカタコンベの階段を上るときに、サンダルが石にぶつかる音に耳を澄ませた。ついに、遠くの扉がガチャンと音を立てると、ラザロは飛び起きた。親の教えよりも好奇心に駆られて、彼はベッドの下から食べ物を取り出し、布で包み、つま先立ちで廊下を進んだ。トンネルの交差点に着くと、左手にベニオントンネル、右手に短い廊下があり、彼は右に曲がって短い独房の通路に入った。壁には6つの独房の扉が並んでいた。3つずつ向かい合っている。死者を安置する地下室ではなく、これらの部屋は生者を閉じ込めるための鍵のかかる扉を備えた独房だった。扉には細長い窓があり、スライド式の鉄板がはめ込まれていた。

ラザロは右端の独房に近づき、窓の扉を開けた。すると、つぶやくような祈りの声が止んだ。

「こんにちは、旦那様。食べ物を持ってきました。私はラザロと申します。ご希望でしたら、お話をさせていただきます。」

牢獄の藁がカサカサと音を立て、声が聞こえた。「こんにちは、ラザロ。主イエス・キリストの御名が崇められますように。」

ラザロは窓から食べ物を渡し、「祝福された方。どうぞお受け取りください」と答えた。

囚人がそれを取り戻すとき、ラザロはちらりと彼の顔を覗き込んだ。彼は明るい色の髪、茶色の瞳、そして細い顎鬚を生やした若い男で、細身の顔立ちを際立たせていた。

「大変感謝しております」と囚人は答えた。囚人はドアに身をかがめ、ラザロも同じように身をかがめた。二人の間にはわずか2インチ（約5センチ）の檜の板しか残っていなかった。

ラザロはドアをつつきながら言った。「なぜここにいるんだ？」

囚人は口いっぱい食べ物に詰め込んだまま、「異端の罪で告発された。異端審問にかけられるのだ」と答えた。

"あなたは何をしましたか？"

「私はイエスが生きたと生きている。」

「では、どうしてそれが異端になるのですか？」

囚人は食べ物を飲み込み、説明した。「司教が多くの兵士を伴って私たちの村にやって来て、全員を集めました。彼は私たちの名前と職業を書き留めました。

教会への十分の一税の額を測るための集計帳。村の多くの人々が

私たちは悔悛の兄弟会、聖フランシスコ第三会の会員であったが、その申し出を拒否した。それは間違っていたからだ。

「十分の一税を納めるのは間違っているのですか？」とラザロは尋ねた。

「イエスは完全な使徒的貧しさの中で生涯を送られました。神の人は皆、キリストのように生きることが求められています。『金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通る方が易しい』と書いてあります。人は、金銭も商売も持たないときに貧しいのです。」

それでも彼はキリストにあって豊かであり、キリストに十分の一を捧げることができるのです。」

"どうして？"

「畑の十分の一を刈り取らずに残さない。家畜の十分の一を放っておきなさい。果物の十分の一を摘まずに残さない。食事の十分の一を飢えた人に与えなさい。十分の一とは、捧げ物であり、神のためにある。神殿は、いかなるものに対しても十分の一税を徴収する場所ではない。神殿は、礼拝のためだけの場所である。

「しかし、教会は貧しい人々を助けているでしょう？」

「教会が神に捧げるべき十分の一税を集め、それを何らかの目的に用いるならば、その意図がどうであれ、その献金は神へのものではなく、教会へのものとなる。これはルカとマタイによる福音書に書かれている言葉である。」

「その言葉は知っています、閣下。司教と兵士たちにその言葉を見せましたか？」

「彼らは彼らのことを知っている。」

「なぜ彼らに『働くつもりだ』と言わなかったのか。そうすれば、彼らが去った後、皆で逃げられたかもしれないのに。」

「イエスは逃げ出したのか？」

ラザロは頭を掻き、敷石を調べてから、

ドア。「それなら、イエスと同じ職業に就くと彼らに言ってみたらどうでしょう。貧しい人々に神について教えることがあなたの仕事だと伝えてください。あなたの教えの十分の一を彼らに捧げてください、そうでしょう？」

囚人はくすくす笑った。ラザロは困惑した犬のように首をかしげた。「そう簡単にはいかないんだ、ラザロ。神の前で誓いを立てなければならぬ。異端審問所は既に私を断罪する質問を用意している。誓いを立てて嘘をつくことはできない。私は既に判決を受けている——火刑に処されるのだ。」

「火あぶり？教会が人を火あぶりにするの？」

「数百軒。その後、焼失した。」

「教会？しかし、教会は神から出たものだ。なぜ人々を火あぶりにしなければならないのか？」

「理由は様々です。主に、十分の一税を納めなかったり、他の信仰を貫かなかったりすることが挙げられます。」

ついにラザロは反論した。「それなら、それは嘘だ。聖マタイの言葉にはこう書いてある。『すべての罪と悪口は人々に赦されるが、聖霊による悪口は赦されない』と。」

「嘘をついてはならない。ラザロよ、この言葉を覚えていないのか？」

ラザロは話し始めた。「私は彼らを知っています、旦那様。しかし、もし彼らがあなたを焼き殺したら——」

「イエスが誓いを立てなかったように、私も誓いを立てない。私を不当に非難する者たちから逃げない。」

私は自分の身を守るために彼らに嘘をつくつもりもない。」

「閣下、もし彼らがあなたを焼き殺したら——」

「イエスは嘘をついたり、誘惑したりしなかった。ラザロよ、私を主から引き離そうとしないでくれ。」

「先生、一つお伺いしてもよろしいでしょうか？」

「確かに、ラザロよ。」

「もし彼らがあなたを焼き殺すと知っていたのなら、なぜ私にこの扉を開けるように頼まなかったのですか？」

「私は既に自由だ。この扉は、開いていようと閉じていようと、自由を生み出すことはできない。自由とは内だ。」

「逃げられるように、この扉の門を外してもいいですか？」

「とんでもない。また私を誘惑しようとしているのか、ラザロ？」

「いいえ、旦那様。ただ、なぜご自身を救おうとされないのか、私には理解できません。」

「信仰だよ、ラザロ。私はすでに信仰によって救われているんだ。」

「そして、あなたが言うように、彼らはあなたを焼き殺すつもりなのか？」

「そうするだろう。」

「もしこれが真実なら、なぜ私はそのようなことを読んだことがないのでしょうか？」

「あなたはまだそれらを読む立場にないのかもしれませんが。しかし、あなたは博識です。もしかして、聖職者の少年ですか？」

"私は。"

「ああ、なるほど。人が馬を操り、牛を追うように、君は馬であり牛なのだ。息子は父になり、聖職者の少年は共に仕える修道士になる。一つの世代が次の世代を生み出すのだ。」

ラザロは頭を垂れ、その言葉の奥深さをじっくりと考えた後、再び戸口の方を向いた。「お名前を教えてくださいませんか。誰のために祈っているのかが分かるように。」

「私はキリストにあって貧しい者です。どうか私のために祈ってください。」藁をかき混ぜた。「あなたの寛大さと付き添いに感謝します。さて、私は自分の祈りを捧げなければなりません。主イエス・キリストの御名は祝福され、聖ペトロ・ヨハネ・オブ・オリヴィの遺言は祝福されますように。彼らの御名は祝福されますように。」囚人はそう唱えながら、ドアから這い去った。「こんばんは、ラザロ。」

ラザロは彼の後ろから呼びかけた。「キリストにある貧しい人よ？」

沈黙。

「キリストにある貧しい人よ」とラザロは再び呼びかけた。しかし、囚人はそれ以上何も語らなかった。

こうしてラザロは独房を出て歩き出した。しかし、自分の部屋に向かう途中、廊下を出た途端、メイン通路に隣接し、彼が出て行った通路の真向かいにあるトンネルから、パチパチという音が聞こえてきた。木が砕けるようなその音は、ベニオン・トンネルの奥深くから響き渡った。

地下には無数の動脈が張り巡らされている。ラザロの記憶にある限り、まるで石に刻まれた法律のように、ベニオンを除くカタコンベのすべてのトンネルを自由に歩き回れるという決まりがあった。イヴァンは、ベニオンの危険な屋根石の下に足を踏み入れることを禁じていた。ベニオンは、小雨が降った後でも水漏れするほど緩く吊り下がっていたのだ。それに、ベニオンは、封印された墓の扉しかない、ただの死の側道に過ぎなかった。

何世紀にもわたる錆で覆われた、固く閉ざされた錠前。彼にはそこへ足を踏み入れる理由は何もなかった。しかし、イヴァンは、献身的な親によくあるように、ラザロの芽生え始めた独立心を過小評価していた。つまり、子供を信じ、見て見ぬふりをしていただけだ。

ラザロはベニオンの入り口の前に立ち、その空洞の奥深くに響き渡る水の滴る音に耳を澄ませた。再び、彼はその異変を聞いた。それは、重い荷物の重みで板が軋む音に似ていた。

重荷。好奇心が彼を襲い、誘惑の果実に身を委ね、独立心が彼を突き動かした。こうして彼は息を吸い込み、周囲を見回し、ベニオントンネルをこっそりと進んだ。いくつもの地下室の扉を駆け抜け、ちらりと一瞥するだけで済ませた。やがて廊下の突き当たりたどり着き、騒ぎの原因を発見した。最後の地下室の扉が外側に反り返り、ギザギザの破片が縦に走っていたのだ。垂直の板。

すでに、木製の扉と石の枠の間には隙間ができており、鉄製の錠前は壊れていた。彼は目を丸くして扉と枠の間から覗き込み、大きな石造りの建物の右側の壁に、長方形のくぼみが4段に並んでいるのを発見した。それは人が住んでいた墓だった。地下室。内部は近くのテーブルで遮られ、それ以上の視界は遮られていた。錆びた鉄製の十字架が奥の壁に掛けられていたが、半分しか見えず、薄暗い部屋の全貌はさらに見えにくかった。

彼は墓の入り口の匂いを嗅ぎ、何世紀にもわたる混じり合った匂いが墓から滲み出ているのを感じ取った。腐った布の匂い、白っぽい骨の匂い、古びたカビのむっとした悪臭、そして湿った石の甘い匂い。好奇心に駆られたラザロは、指を隙間に差し込み、引っ張った。彼が無理やり広げると、扉は床を擦った。新しい木材は、砕け散り、砕け散り、そして――

「ドーン！」その瞬間、扉が爆発し、板の破片が反対側の壁に降り注いだ。要石が支えを失い、扉の上のアーチ石が崩れ落ちた。さらに高い場所では、壁と隣接する屋根の大部分が崩れ落ち、雪崩のように彼の周囲に流れ込んだ。轟音とともに混乱が広がる中、彼はターミナル壁の隅に飛び込んだ。壁の一部の石材が床に崩れ落ちた。

静寂が戻り、石畳に水がせせらぎを立てる音だけが響いていた。埃と瓦礫が落ち着くと、ラザロは汚れながらも無傷でゆっくりと立ち上がった。フードの下から犬のような耳をぴくぴくさせ、音を探した。流れ落ちる水は脈打つ轟音のようで、小石が滑り落ちる音は深い谷に岩がぶつかる音のようで、ネズミの足音がかすかに走り回る音は雷鳴のような蹄の音のようだった。しかし、ラザロの注意はベニオン・トンネルの入り口に釘付けだった。地下墓地の扉がきしむ音も、石段を僧侶のサンダルが叩く音も聞こえず、ただ遠くの牢獄の通路で藁をまとった囚人がよろよろと歩く音だけが聞こえた。

ラザロは周囲の残骸を調べた。トンネルの終端壁はほとんど残っていた。石が彼のそばに崩れ落ちた小さな窪みを除けば、壁は無傷だった。損傷した壁の部分は、底なしの穴のように見えた。すでに、3世紀も前のカビ臭い風がその開口部から吹き出していた。そして彼は気づいた。

行き止まりと思われたベニオン・トンネルの終点と思われた場所は、崩れかけた偽の壁だった。通路は明らかにその先まで続いていた。

ラザロは開口部から中を覗き込み、風が唸る穴の前でフードをひらひらと揺らした。唯一の違いを除けば、続くトンネルは未封鎖区間と全く同じだった。トンネルの壁には地下室が並んでいたものの、どの空洞にも扉が取り付けられていなかったため、完全に完成する前に放棄されたかのようなようだった。彼は緩んだ石の間を押し分け、中へと足を踏み入れた。

彼には明らかだったが、地下納骨堂には遺体が安置されたことは一度もなかった。最初の納骨堂にも、二番目の納骨堂にも遺体はなかった。そして、遺体は常に下層の石を錆色の緑青で汚染し、それは何世紀経っても取り除くことができない。彼はトンネルを進み続け、数多くの空室で未完成の納骨堂。

地下室の空気は清浄なままだったが、彼が廊下をさらに奥へと進むにつれ、空気は死の気配を帯び、古代の遺物によって汚染されたような匂いが強まっていった。

ラザロはさらに奥へと進んだ。トンネルの突き当たりで、彼は最後の地下室の入り口が他のものとは異なっていることに気づいた。そこには短くぼろぼろの扉があったが、崩れかけた石壁の残骸で塞がれていた。まるで、今やむき出しになった扉の痕跡をすべて隠すために、後から新しい石の壁が築かれたかのようなようだった。ひび割れた扉板の向こうからは、腐敗の臭いが漂っていた。彼は緩んだ石を払い除け、蜘蛛の巣のカーテンを引き裂き、穴だらけで虫食いだらけの板を押し退け、中へと滑り込んだ。光は微塵も差し込まなかったが、短くぼろぼろの扉の残骸の向こうにある、汚れのない、死のように静まり返った暗闇の中で、ラザロの飢えた瞳は異常に大きく膨らんだ。完璧な夜行性捕食者の眼球のように、彼の目は暗闇の鱗を剥がし、すべてを見通した。

その地下室はかつて居住空間として使われていたかのような様子だったが、明らかに墓の臭いが漂っていた。割れた陶器、腐った布、埃まみれの遺物が散乱していた。ラザルスは壁のくぼみをくまなく探したが、修道士の包帯で巻かれた遺体は見つからなかった。

むしろ、開け放たれた墓は物置棚として使われており、奇妙な雑多なものが詰め込まれていた。そして、もう一つの匂いが漂っていた——かすかなインクの刺激臭だ。ラザロは部屋を横切り、かつて机として使われていた細長いテーブルとベンチの前に立った。天板には傷や蠟、インクの染みが付着していた。その上には、インクが固まって空になったインク壺が置かれていた。

テーブルの表面をよく見てみると、何か奇妙な点があることに気付いた。

彼は注意深く、首を傾げながらじっと見つめた。インク壺も染みも、特に目立った特徴はなかった。しかし、彼の注意を引いた何かは、はっきりとは見えなかったものの、確かに存在していた。彼は鼻をテーブルからほんの数センチのところまで近づけ、匂いを嗅いだ。それでも、何も感じ取れなかった。

それから彼は後ずさりし、机の上に体を置いた――そしてそれはそこにあった。ラザロは埃を払い落とし、彼の五感を悩ませていた好奇心は、すべて彼の目を通してのみ感じられた。埃とゴミが取り除かれると、残っていた机の傷が形を成し、彼は何も見つけられなかった。

ランダムな彫刻だが、整然としたシンボルだ。象形文字のような絵ではなく、幾何学的な図形が連続して並んでいるように見えた。それらの位置と間隔が発音を決定づけ、ラザロの

目。見覚えのある模様の中に、円と線が文字、単語、文章を形成し、最終的には明瞭で理解しやすい意味の流れへと収束していった。しかし、その碑文はフランス語でもラテン語でもなく、羽根ペンと羊皮紙の世界では知られていない奇妙な言語だった。実際、その言語は地上で生まれたことがないため、机に書かれたメッセージは人間には到底書き記せないものだった。ラザロは苦労しながらもその言葉を発音し、意味を理解した。

今日、私は弟にプレゼントを贈ります。

この暗号文には私の全文が収められています。

地下室の隅で、

それは石4個分の高さだ。

4つ目の石が緩んでいる。

ラザロは地下室の隅の方を見た。床の敷石より壁石がちょうど4つ高いところだ。摩耗した石の縁の周りに、モルタルが剥がれた狭い隙間があった。彼はその石を壁から外し、そこに残っていた古い蜘蛛の巣の空洞から、黄ばんだ分厚い巻物を取り出した。そして、それを机の上に広げた。

一番上のページには手紙が貼られており、そこにはこう書かれていた。

兄弟よ、汝のために――

西暦1064年9月28日、私はここに多くの葉の最後の一枚を記す。私の心は重く沈む。まもなく私は

死の状態を知っている。その匂いが私を蝕む。破滅の中で、私は神のその部分に驚嘆せざるを得ない。なぜ神は、そのような悲しみと悪が神の御下で蔓延することを許されるのか。私はそれを理解できない。私の目には決して理解できないだろう。私の信仰消え去った。胸の中の炎は消え、私はただ死を待つばかりだ。

評議会について警告しておかなければなりません。評議会の誓約により、私は協定を提案されました。これまで、

その協定とは、私が翻訳の能力を使ってゲートストーンの言語を解読する代わりに、彼らは私に自由を与えるというものだった。それは、私がガルディアン修道院から永遠に逃れる自由を意味する。私は同意する以外に選択肢はなかった。

私が彼らが私の部屋に一つずつ持ってきてくれた聖句を翻訳している間に、丸二シーズンが過ぎました。私の人生の中で、その短い期間だけは、神の人として満ち足りた生活を送ることができました。もはや監禁は私にとって重荷ではなく、評議会はまるで私が王であるかのように私の部屋を飾り立ててくれました。すべてが私に与えられ、私の鎖が緩められるか、あるいは私の戸口の外に永遠に駐屯している教皇衛兵とその息苦しい松明の煙が消え去るかのどちらかを除いては。

私には自由以外に何も欠けておらず、腕に巻き付いた冷たい鎖と同じくらい現実的な夢を集めた。しかし、第二の季節の半ば近く、私は揺るぎない悲しみに陥った。夢を追い払うためさえ。門石の言葉から、私はその目的を知った。それは私を悩ませ、私は祈ることをやめた。私の信仰は、

恐れているのは、永遠に失われてしまうということだ。死以外に望むものはない。神の計画においては、私は決して神の方法を理解することはできないだろうが、それでも私は常に神における自分の居場所を知るだろう。

それ以降、私は霊媒術を中止し、評議会を激怒させた。これに対し、評議会は私の部屋から家具をすべて撤去し、私が彼らのために働き始める前に苦しんでいた劣悪な環境に私を戻した。私は病弱になった。長い時間が経った後、私は自由を約束されることを条件に、契約に基づいて霊媒術を再開することに同意した。

その後、私は仕事を終え、3つの季節が過ぎました。しばらくの間、私は自分の監禁について疑問を抱いていました。評議会の修道院長は、私がしばらくの間、司祭たちに助言を与えるべきだと言いました。私はほぼ1シーズン、彼らに会っていません。その後、私の部屋の状態が悪化していることからわかるように、私はもはや評議会にとって何の役にも立たないのだと悟りました。やがて、彼らは最初から私をこの束縛から解放するつもりなど全くなかったのだと悟りました。今まさにインクの壺が乾きつつあるので、これが私の最後の言葉です。驚いたことに、今朝早く、評議会の修道院長が私の独房にやって来ました。彼は、私が決して解放されることはないだろうと告げました。私の記憶では、それは評議会の最終決定に反するものでした。

石の所在や碑文について、あまりにも多くの情報が漏らされた。その代わりに、評議会は私に罪の赦し、苦痛のない睡眠薬、そして聖なる埋葬の約束を与えてくれた。

ああ、明日彼が戻ってくるので、この申し出をじっくり考える時間はまだ一日しかない。しかし、太陽の恐怖に直面するよりは、やはり薬を受け入れるしかない。この言葉を読み解ける兄よ、門石に刻まれたすべての碑文を君に託す。君が私よりも良い人生を送ることを願う。私の人生から何かを学んでほしい。

確かに、私は甘美な悲しみの記憶を胸に、ただ時を自由に彷徨うしかない。私は自分のものではない人生を、自分のものではないこの墓の中で生きてきた。しかし、ほんの一瞬だけ、完全に自分のものだった夢——自由という夢——それは、自由そのものが私に与えてくれるどんなものよりも甘美なものだった。

私は-

聖職者ナラムシン  
—評議会通訳

冷たい風がページを揺らし、腐敗した骨の匂いを運んできた。彼は机からページを集め、さらに地下室を調べた。奥の壁の一番奥まったところに、何かが完全に隠された布がかけられていた。彼は近づいた。ラザロがその布を掴むと、それはまるで蜘蛛の巣で織られた布のように、彼の指の中で引き裂かれた。彼は腐りかけた布を慎重に剥がすと、

「あ！」突然、まるで噛まれたかのように布を放した。息が詰まり、彼は床を後ろ向きに倒れた。そして、寒気が全身を襲い、心臓が激しく鼓動した。焼けるようなチクチクとした痛みが全身を包み込んだ。彼の目の前には、残酷にも鎖で繋がれたグロテスクの遺体——ナラムシンの骨——が横たわっていた。彼は数多くの死体を見てきたが、グロテスクそのものを見たのは初めてだった。人間の頭蓋骨に、分厚い牙が突き刺さっていた。死体の下には翼の骨が散らばっていた。ラザルスは、自分自身——自分よりも大きくなった姿——が腐敗し、鎖に絡まっているのを、じっと見つめた。

ラザロは完全な恐怖の境地に達した。それは、叫び声と凍りついた沈黙の間に凝縮された、すべてを捉えて離さない、束の間の状態だった。もし彼がまだ生き生きとしていなかったら、彼の心臓は死神にその鼓動を止めてくれるよう懇願していたことだろう。

彼は飛び起き、ナラムシンの巻物を持って地下室から飛び出した。ベニオントンネルを駆け上がり、偽の壁の穴をくぐり抜け、散らばった石の間を飛び越えた。一瞬のうちに、彼は汚れない見慣れた自分の部屋の壁の中に戻っていた。

彼はベッドの掛け布団の下に身を隠していた。静寂が続く中、彼の心臓は思考とともに激しく鼓動していた。彼は慌てて巻物を敷物の折り目に押し込み、頭巾の紐を締め直し、ベッドに深く潜り込んだ。心は汚れ、穢れたように感じていた。無垢な夢を、鎖に繋がれた自分の残骸という恐ろしいイメージ以外の、何でもいいから見たいと切望した。これほど孤独で、これほど脅威を感じ、これほど死ぬほど恐れたことはなかった。

心臓の鼓動と心の苦悩が相まって、彼は歪んだ悪夢へと陥った。それは恐怖というより、むしろ過度の精神状態の衰えを感じさせるものだった。夢の中で、彼は裸の自分が曲がりくねった階段を駆け上がり、より高い地下墓地の入り口の扉へと向かっているのを見つけた。彼は自由へと駆け出した。トンネルから、崩れ落ちる死の壁から、自分を解放したいと切望していた。心臓が鼓動するたびに、彼は一段ずつ階段を上った。しかし、速く登れば登るほど、入り口は彼から遠ざかり、遠くにそびえ立っていた。階段が次から次へと続き、さらに階段が続く。天に昇るほどの数だ。そして、永遠にも思えるほど忍び寄る夕暮れの間中、恐ろしい夢が何度も何度も繰り返された——ドンドンドン！ドンドンドン！

～\*～

夜明けの深紅の光がガルディアン修道院に降り注いだ。しかし、修道士や従者は宿舎に閉じこもり、朝の礼拝も行われなかったため、薄暗い修道院の敷地はナラムシンの地下聖堂のように生命感に欠けていた。それでも、ほとんどの宿舎では、司祭がひざまずいて彼は板張りのベッドの足元に横たわり、苦痛のない変容を祈っていた。一方、別の部屋では、石造りの狭い窓枠の中で焦燥の影がうねり、中庭を好奇心に満ちた目で見ている。不安と緊張の空気が漂っていた。

イヴァン修道士は独房の窓にもたれかかり、幽霊のようなローブが横切るのをじっと見つめていた。中庭。彼は昇り始めた太陽をちらりと見て、窓枠に指を食い込ませた。下では、ヴォーニヒ修道院長が屈強な3人の僧侶を浴場へと案内し、儀式が始まっていた。

中に入ると、修道院長は修道士たちに「ドアに鍵をかけて、自分の場所へ行きなさい」と指示した。窓だ。お前たち二人は、それを持ってこい。そして、その歯に気をつけろ！」修道院長は東側の壁に最も近い石のテーブルに向かって大股で歩いた。テーブルの天板は石炭のように真っ黒で、幾度もの火事で焦げ付いていたのがはっきりと見て取れた。二人の僧侶は一緒に浴室の薄暗い中に姿を消し、三人目の僧侶は修道院長の周りを回り込み、夜明けの方向を向いて閉ざされた窓の格子板の間の縦の隙間から覗き込んだ。

浴場の奥から、足を引かず音、うめき声、シューという音が聞こえ、何か争っているのが分かった。

「気をつけろ！」ヴォーニヒは叫んだ。彼はローブから小さなフラスコを取り出し、テーブルの上に粉を振りかけた。そして、祈りの言葉を呟いた。

二人の屈強な修道士がグロテスクな女を連れて戻ってきた。女は抵抗したが、二人は彼女を連れ出した。「修道院長、太陽が壁を越えましたよ！」窓際の司祭が叫んだ。

ヴォーニヒはうなずきながら、まだぶつぶつとつぶやいた。修道士たちは彼女をテーブルまで引きずっていき、ヴォーニヒは彼の原稿から朗読した。「Pater noster, qui es in caelis, sancti icetur nomen tuum; adveniat regnum tuum; iat voluntas tua in terra—」

グロテスクはテーブルの端に足を突っ張り、捕らえた者たちに抵抗した。

彼女は彼らに向かって「バウト！エカ・アム・シャ・トゥラー！」と叫んだ。

修道院長はこれに反論し、「—カエロのテラ・シカット。パナム・ノストルム・コティディアナム・ダ・ノビス・ホーディー—」と続けた。

彼女は僧侶たちにシューッと威嚇の声を上げ、もがきながらテーブルから身を遠ざけた。僧侶たちは彼女の手首と足首に革の拘束具を叩きつけた。彼らは紐を引っ張り、彼女のバランスを崩させてからテーブルの上に引きずり上げた。彼女の翼が彼らの顔に叩きつけられた。僧侶たちはテーブルの両側に立ち、それぞれ一對のストラップを持って彼女の手足を石板に固定した。抵抗は終わった。彼女は

彼女は身動きが取れなかった。膝を曲げたまま、ただ修道院長を見つめることしかできなかった。

ヴォニグの目は書かれた文字を横切った。「—et dimitte nobis debita nostra, sicut et nos—」

グロテスクは、少女のような優しい懇願で彼の言葉を遮った。「シャット・ナ・カウト…ん？カウト？」

ヴォニグは注意をそらし、抱えていた書物からちらりと顔を上げ、優しくもひどく傷ついた顔を見つけた。そして、美しい青い瞳の奥に浮かぶ、こぼれ落ちる涙さえも目にした。まるで初めて気づいたかのように、彼女はこれまで見てきたどんなグロテスクよりも、はるかに人間らしい姿をしていた。翼と耳を除けば、彼女は屈強でしかめっ面をした二人の司祭の拘束具に挟まれた、哀れで怯えた少女にしか見えなかっただろう。

ヴォーニヒは不安げな視線をそらし、続けて言った。「—et nos dimittimus 我々を…」ヴォーニヒは言葉に詰まった。咳払いをして、「—et nos dimittimus debitoribus nostris —」またもや声が詰まった。彼は言葉を途中で止め、くると向きを変え、浴場の向かいにいる司祭に向かって叫んだ。「呪われた窓を覆っている布を外せ！今すぐだ！」

二人の僧侶は繋がれた紐に寄りかかった。彼女は彼らに向かってシューッと音を立てた。もう一人の僧侶は木製の雨戸をつかんだが、ためらった。彼は顔をしかめながらグロテスクな方を振り返った。その時、ヴォニグは彼の目に涙が浮かんでいるのに気づいた。

「もうやめろ、修道士！」ヴォーニヒは彼を叱責した。すると、司祭は即座にシャッターを勢いよく開け放った。

そして、陽光が浴場を照らしていた。

「キーッ！」修道院の敷地に、耳をつんざくような叫び声が響き渡った。浴場の窓からは、灰の雲が沸騰して立ち上った。

浴場の扉が勢いよく開き、咳き込むヴォーニヒが煙の充満した入口から慌ててよろめき出て、目をこすりながら書斎へと急いだ。少し離れたところで、残りの僧侶たちが建物から出てきた。彼らはまた別のグロテスクな石像、つまり翼を広げた太陽に殺されたエルヨの像を担いでいた。その像は跪いた姿勢で凍りつき、上を向いた顔には、絶対的な苦痛を湛えた花崗岩のような表情が浮かんでいた。

中庭の向こう側、二階の寮の細長い窓枠越しに、銀髪の髪を縁取った背の高い司祭が、口元に手を当てて泣いている姿が見えた。寮の屋根のそばでは、また別の目が修道士たちと彼らの像を見下ろしていた。中庭の梅の木の上に止まった、光り輝くカラスの、黒い球体のような目だ。そのカラスは、三人の修道士が最新のガルディアン・グロテスク像——イタリア中部のカンチェッロ修道院に届けられる最後のガルディアン「贈り物」——を運び出し、大聖堂の縁に飾る様子を、敬虔な眼差しで見守っていた。

～\*～

イワンは地下墓地の入り口をくぐった。階段を下りていくと、灯りのついた松明を手に持ち、そわそわしているラザロに出くわした。

イワンは階段で立ち止まった。「ラザロ？」

「修道士様、お伝えしなければならないことがあります。昨晚の出来事です。」

「何があったんだ？」イワンは残りの階段を慌てて降りてきた。「何があったんだ？」彼はラザルスを取り、石の角を曲がると、地下墓地の松明がすでに燃えているのを発見した。「なぜこんなに早く、しかも私が到着する前に、すべての松明に火をつけたんだ？」

「修道士様、大変なことが起こりました。」

「囚人？」

「屋根が崩れ落ちた。」

「どうした？怪我でもしたのか？」イワンは彼の腕をつかみ、彼を振り向かせ、厳格で悲嘆に暮れる保護者のような切迫した様子で彼を調べた。

「いいえ、修道士様。」

「見せてくれ！」イワンはラザルスの松明を受け取り、彼に続いてベニオントンネルの奥へと進んだ。イワンは松明を高く掲げ、石を踏みしめながら、被害状況を調べた。その時、彼は壁にぽっかりと開いた穴に気づき、凍りついた。

「トンネルはまだ続いているのか？」彼は信じられないといった様子で眉をひそめ、ラザルスの方を向いた。

「その通りです、修道士様。」

イワンは松明を穴のそばに掲げ、その炎はうなり声のような風に揺れていた。

「ここにいる」とイワンは言い、窪地を登っていった。

「しかし私は既に――」ラザロは言葉を飲み込んだ。

イワンは彼を振り返り、「ここに入ったことがあるのか？」と尋ねた。

「はい、修道士様、しかし――」

「では、あなたの不服従については後ほど話し合しましょう。」

ラザロは頭を垂れた。穴を通り抜けると、イワンは彼を振り返った。「さあ、おいで」  
では、道をご存知でしょうから。

ラザロも彼の後を追って飛び込んだ。

イワンが空の墓を一つずつ照らしていくと、ラザロはすぐ後ろをついて行った。しかし、イワンが最後の墓に近づくと、少年は後ずさりした。

「修道士様、あそこには骨があります」とラザロは認め、石が散乱した入り口のある開いた扉を指さした。

イワンは中に入ったが、ラザロは立ったままだった。彼はフードの下で耳をぴくぴくさせた。イワンが腐った布をそっとめくる音、イワンが息を呑む音、そしてその後続く静寂が聞こえた。イワンが墓から出てきたとき、ラザロは松明の光に照らされた彼の顔をじっと見つめた。イワンは青白くやつれていたが、何も言わなかった。彼はただ、自分とラザロの間の床を、まるで物思いにふけているかのように見つめていた。

ラザロが沈黙を破った。「修道士様、彼は私にそっくりです。ご覧になりましたか？それに、鎖をつけているんですよ。」

イワンは急いでラザロの横を通り過ぎた。「行かなければ。今すぐだ！」彼は一度も振り返らなかった。

「修道士様、なぜ彼が中にいるのですか？」ラザロは慌てて彼の後ろに回り込みながら尋ねた。

「ベッドに横になっていることを期待していた。見たことは何も言わないで。もう質問は受け付けません。」

少年は彼の辛辣な言葉に怒りを感じ取った。

「お許しください、修道士様。」ラザロはイワンの速くて安定した歩調に合わせて、足早に歩き出した。

新しく発見されたトンネルの区画を後にした後、イワンはラザロに手伝ってもらい、以前落ちていた石で穴を塞いだ。ラザロはこてを持ってきて、新しいモルタルと水を桶に補充した。最後に、他の修道士が壁が偽物だと疑うことはないだろうと確信したイワンは、ラザロに自分の部屋に戻るよう命じ、そこに留まるように言った。

イワンは、ベニオントンネルの修復には、  
新たに発見された偽の壁に対して、新しい壁。もし彼の同僚の司祭たちが

グロテスクの遺物が発見されれば、その発見によって必然的に起こるであろう噂と騒動の混乱の中で、ラザロに不当な注目が集まるかもしれない。誰も知るわけにはいかない、と彼は考え、カタコンベを出て修道院長の事務所へと向かいながら修復計画を練っていた。何しろ、ベニオン・トンネルの歴史は周知の事実だった。ずっと以前から、彼はヴォニヒ修道院長にトンネルの崩壊を警告しており、その古さゆえに、崩壊は時間の問題に過ぎなかったのだ。

～\*～

修道院の敷地は修道士と頭を剃った少年たちで賑わっていた。遠くで正門の鐘が鳴った。やがて、ローブを着た従者が中庭を駆け抜けてきた。ラザロのように、麻袋の幽霊のように、少年は目穴が開いた仮面をつけていた。頭はフードで完全に覆われていた。彼は修道士のそばを駆け抜け、修道士は彼を叱った。「ミゲル！  
走る？

少年は歩調を緩め、速足になった。修道院の奥まで来ると、彼はグレート修道士の前に立ち止まり、頭を下げた。司祭は彼に気づいた。「ミゲル、君の顔のマスクは目の横が破れているよ。」

穴が開いていました。イヴァン修道士に縫い直してもらおうか、新しいものを作ってもらいましょう。」

「イワン修道士はもう新しいマスクを縫ってくれてるよ。修道士、私、話してもいいかな？」少年の不明瞭な言葉は、破れたマスクの下に隠された深刻な口の変形を示していた。

「じゃあ、言ってみようよ。」

「門に兵士が！アヴィニオンから来た！馬車に乗って、司祭も乗っている！赤いらららのローブを着て」と従者はどもりながら言った。

「坊や、彼は頭に何をかぶっているんだ？」グレートは突然、衝撃を受けて尋ねた。

「白い帽子が耳の周りをぐるぐる回っている。膝の上にもう一つ大きな帽子がある。赤い帽子がぐるぐる回っている。」

「聖人の名において一体何だ――」グレートは少年に指示した。「よく聞け！アヴィニオンから枢機卿が到着すると修道院長に伝えろ！さあ、行け！」

少年は頭を下げ、グレートに叱られると足早に立ち去った。「ミゲル！走れ！」従者は飛び出し、角を曲がって猛スピードで走り去った。

鐘の音が鳴り響く中、グレートは正面玄関へと歩みを進めた。門の前には、肩まで伸びた黒髪の巻き毛、細い口ひげと顎ひげ、そして翡翠色の目をした背の高い兵士が立っていた。厳格で戦い慣れた顔には、深い傷跡が頬に刻まれていた。グレートは門を外し、門を大きく開けた。兵士は地面に唾を吐き、グレートの周りを通り過ぎた。通りすがりに、兵士は冷たい視線を投げかけ、「もっと大きな鐘か、もっと大きな耳が必要だな」と呟いた。

グレートは眉をひそめ、ボーン大尉の唾液を見下ろした。すると、ブライジ枢機卿が馬車から降りてくるのが見えた。ブライジはグレートに近づき、悪魔のような目を隠すようにつばの広い帽子を被った。グレートは微笑み、軽くお辞儀をし、ブライジの力なく差し出された手にキスをした。

修道士は弓を構えながら言った。「猯下、ガーディアン修道院は大変光栄に存じます。」

「あなたは一体誰ですか？」

グレイトが立ち上がった。「モーリス・グレイト修道士です、閣下。客人の世話役であり、訪問の監督者です。」

「よろしい、グレイト修道士。私を修道院長のところまで案内してください。」修道士が振り返ると、ブラージがそれに続いた。隊長はブラージの隣に倒れ込み、部下4人に後をついてくるように合図しながら言った。「兵士200名、馬14頭、補給荷車6台を率いています。彼らの世話が必要です。」

グレイトはすぐに聖職者の少年を合図して、自分のそばに歩かせた。「厩舎に行ってフェストノー修道士に、客人が来たこと、そして14頭の馬がすぐに手当てを必要としていることを伝えなさい。」

少年は剃り上げた頭を傾け、姿を消した。

グレートはブラージに話しかけた。「もしかして、あなたと部下たちは空腹ですか？もしよろしければ、食堂と厨房をすぐに開けましょうか？」

「そうしろ」とブラージは怒鳴った。

グレイトは続けた。「閣下、一行は今夜もご滞在されますか？」

「数日。」

グレイトは足を止めた。「デイズですか、閣下？我が修道院には、これほど多くの男性を収容するだけの物資がありません！」

ブラージは彼を促した。「詳細は追って話し合おう、修道士。まずは修道院長とだ。」

中庭の向こう側では、僧侶や従者たちが行列を物珍しそうに見つめていた。訪問者は皆外国人だった。ブラージは彼らに注意を払わなかったが、ボーンは皆をじっと観察していた。彼の目は観察していた。

礼儀などなく、彼らは至る所で倒れ込み、計測したり、品定めしたりしていた。一行が建物に入ると、ボーンは戸口のそばで指を鳴らした。兵士のうち二人が彼の後ろから倒れ込み、戸口の外で気をつけの姿勢をとった。グレートはブラージを廊下を通して修道院長の書斎へと案内した。彼は軽くドアをノックした。

中から荒々しい声が返ってきた。「入れ！」ボーンが再び指を鳴らすと、兵士たちが応じた。彼らは両脇に回り、ドアの外で気をつけの姿勢をとった。グレート、ブラージ、ボーンが書斎に入ると、ヴォニグ修道院長が背を向け、本棚の方を向いているのを見つけた。ヴォニグはゆっくりと振り返り、両手に抱えた開いた本に全神経を集中させていた。やがて顔を上げると、突然、自分の執務室に枢機卿がいるのを見て驚いた。彼は敬虔な頭を下げた。「猯下。」

「修道院長」とブラージは同じように答えた。

グレイトが口を挟んだ。「ヴォニグ修道院長、枢機卿閣下、えっと…」

「カーディナル・マッソン」とブラージはグレートの紹介を手伝ったが、その際、全く同じ偽名を使った。

外典への不正アクセスを行った際の「マッソン」の行為。  
グレートはブラージに手を差し出しながら紹介を続け、「マッソン枢機卿閣下は、アヴィニオンから当修道院にお越しになりました」と述べた。

「以上です、グレイト修道士。」ヴォニグはそう言って彼を下がらせ、本を棚に戻した。  
グレートは頭を下げて立ち去った。「残念ながら、教皇陛下から悪い知らせをお伝えしなければなりません。枢機卿評議会のバジリステ枢機卿とリーン枢機卿が既に亡くなられたことをご存じでしょうか。」

「最近のやり取りで分かったことです」とヴォニグは認めた。ポーンは部屋を見回した。  
ブラージは穏やかな表情を浮かべた。「しかし、絶望の暗闇の中にも、希望の光を見出すことがあります。修道院長、その点において、私も良い知らせをお伝えします。」

「ああ？」ヴォーニヒは微笑んだ。

「あなたは外典評議会の委員に任命されました。評議会への献身的な奉仕により、聖下の御目には大変高く評価されています。聖下はアヴィニオンであなたをお待ちです。」

修道院長は笑みを消した。「上院？私はただの司教だ。上院議員を務めるのは枢機卿だけだ。」

ブラージは言葉に詰まったが、すぐに落ち着きを取り戻し、「いずれにせよ、あなたとイタリアの下級評議会の修道院長は、上級評議会に昇格する」と述べた。

「ドミンガス？」

「確かに、ドミンガス・オブ・カンチェッロ修道院長。聖下はあなた方お二人を教皇宮殿へ速やかに召喚されました。」

「しかし、修道院はどうなるのか？誰が監督するのか——」

ブラージ枢機卿は手を振って彼の言葉を遮り、安心させるような口調で言った。「聖下は、この修道院が何を守っているかを十分にご存じです。私がここにいるのもそのためです。厳重な護衛が必要なのも同様です。修道院は完全に安全です。聖下は、適切な後任を任命するまで、私がこの修道院の暫定修道院長を務めるよう指示されました。また、別の枢機卿が護衛付きでイタリアのカンチェッロ修道院に向かっており、適切な後継者が見つかるまで、そちらの暫定修道院長を務める予定です。」

ブラージは腰に手を当てて微笑んだ。「ヴォーニヒ修道院長、上院へのご任命を心よりお祝い申し上げます。また、外典への長年にわたる献身的なご尽力は、実に素晴らしいものです。」

ヴォニグ修道院長は何か異変を感じ取っていた。リーン枢機卿が亡くなる前に、枢機卿は彼に手紙を送っていた。その手紙の中で枢機卿は、クレメンス教皇が外典会議の秘められた目的、あるいはその二つの修道院の役割、そして教皇が会議の正式な長として果たすべき責務について、まだ何も知らないと伝えていた。

ヴォーニグはブラージに質問した。「マッソン閣下、上級評議会がなかったため、

リーン枢機卿の逝去後、枢機卿の任命が行われた中で、教皇猊下はどのようにして外典に関する事柄を知らされたのでしょうか？

「教皇猊下はその後、外典の記録を調査されました」とブラージ氏は反論した。

「しかし、火災で記録が焼失してしまいました。法王は、焼失してしまった記録をどのように調査されるのでしょうか？」

「すべてが燃え尽きたわけではないかもしれませんが、私にはすぐに答えられることはありません。しかし、あなたが聖下にお会いした際に、そのような詳細について聖下に尋ねてみてはいかがでしょう。」

ヴォーニヒは目を細めた。「閣下、もしよろしければ、聖下の任命状を見せていただけますでしょうか？」

「もちろんです、修道院長。」ブラージは祭服から手紙を取り出した。

修道院長は手紙の蠟印を破り、教皇クレメンスの署名が入った命令書を読み上げた。

ヴォーニヒは手紙を折り返し、蠟印の両面を調べた。「なぜ教皇猊下の紋章の刻印がないのだろうか？」

ブラージ氏はその文書を擁護し、「ご存じのとおり、評議会の性質は秘密です」と述べた。

教皇猊下は、二つの外典修道院は枢機卿のみが統治すべきであると強く主張されている。

あなたはどんな悩み事でも神に打ち明けなければなりません。そして神はあなたがすぐにそうすることを期待しておられます。

ヴォニグはポーンを見た。ポーンの緑色の瞳が彼を見つめ返した。ヴォニグは胸を締め付けながらブラージにこう告白了た。「私は上級評議員を務めることはできません。私は年老いて疲れ果てています。私の命はもう長くありません。」

「それでは、修道院長、ご自身の状況を聖下にご報告ください。私はただ聖下の召喚状をお届けするだけです。」

「私は奉仕できません——」

ブラージは口を挟んだ。「アヴィニョンのマロウ城があなたをお待ちしています。そこがあなたの新しい住まいとなるでしょう。荷物をまとめる時間は明日までです。船長があなたの私物をきちんと保管します。それから、そこに住む修道士たちと会って、あなたの良い知らせを伝え、私を新しい修道院長として紹介してください。」

「承知いたしました、閣下。」

「修道院長、あなたは教皇猊下の決定にご満足いただけていないようですね。」

ヴォーニグは落胆を表明した。「年を取ると、死について考えることが多くなる。地下墓地に納骨室があるのだが、恐らく使うことはないだろう。」

「修道院長、あなたの死の詳細は手配できます。まず、あなたは聖下に報告しなければなりません。あなたが修道院長を務めている間、私は客間に滞在します。あなたはそれをきちんと手配してください。」

警備兵と馬の世話がきちんとされているか？

「承知いたしました。もしかしたら、あなたに護衛を付けるかもしれませんー」

ブラージは彼の言葉を遮った。「私は自分の道を見つけるでしょう、修道院長。」

「かしこまりました、閣下。」ヴォーニヒは頭を下げ、ブラージはボーンと共に書斎から出て行った。ヴォーニヒは窓の方を向き、虚ろな目でじっと見つめた。偽造した手紙が、彼の弱々しい手の中でぴくぴくと動いていた。彼はイワンと、あの奇形のラザロ少年のことを考えた。自分が命じ、掘り、自分のために確保した地下納骨堂のことを思い巡らした。そしておそらく、自分の遺骨は、長年仕えた愛する修道院に二度と戻ることはないだろう、と彼は思った。

ヴォーニヒは自室に閉じこもった。ブラージは敷地内と施設をくまなく調べた。ボーン大尉は部隊を率いて修道院内をくまなく搜索し、要所と思われる場所に警備兵を配置した。日暮れまでに、大尉は修道院をまるで難攻不落の要塞へと変貌させた。出入り口はなく、あらゆる場所に兵士が警戒態勢を敷いていた。

翌朝、礼拝が終わるとすぐに、ヴォーニヒ修道院長は動揺する修道士たちを落ち着かせ、アヴィニョンへの転任を告げた。正午、彼は馬車に乗り込み、騎馬兵に護衛されて出発した。ブラージは意図的に急いで行動した。

新修道院長は、修道院の上級修道士のみを集めた会議を招集した。招集されたのは、門石の存在と、その守護者としての修道院の真の目的を知っている者だけだった。会議を招集した理由は単純明快だった。教会の異端審問における常套手段とほぼ同じように、下級修道士たちを徹底的に調査するためである。

大学枢機卿であったブラージは、魔女狩りの手法に精通していた。彼が知っていたように、異端審問の方法は厳格かつ単純明快だった。すなわち、集会を開き、絶対的な権威を導入し、不正行為の自白を要求し、そして証言によって民衆を分裂させるのである。

ブラージは、上級修道士の集会で、すべての司祭に手紙を書いて日没までに提出するように指示した。その中で、彼は3つのことを期待していた。まず、司祭たちは

修道院の施設や慣習の中で改善できるものをすべてリストアップするようにとブラージは指示した。ブラージ自身は提案された改善案には全く関心を示さなかったが、このリストは修道士たちの注意を、彼の策略の核心であり、異端審問の根本原因でもあった次の2つのリストからそらすのに役立った。ブラージの2つ目の要求は、修道士たちが、修道士として「ふさわしくない」と思われる行動を目撃したら、それをすべてリストアップすることで、仲間の修道士たちを罪に問う証言をすることだった。3つ目、そして最後に、ブラージは修道士たちに、個人的な罪の告白を書き留めるよう求めた。彼は修道士たちに、書面での告白はすべて秘密にされると告げた。

憤慨した修道士たちは、従う以外にほとんど何もできなかった。しかしブラージの運動は

厳しく見えるかもしれないが、それは非常に効果的であることが証明された。穀物の脱穀機が期待する結果と同じように、この作業は麦と粃殻、つまり良い種と悪い種を分離したのだ。善良で立派な修道士たちを排除した結果、問題のある行いをした司祭は7人だけになった。その7人のうち、ブラージはオディーノ修道士をリストから外した。彼は、自分が「肥満の酔っぱらい」とみなした人物を司祭として迎え入れたくなかったのだ。

ゲートストーンの開館式への参加について、ブラージはイタリア人の名前も消した。彼がフランス人だと考えていたこの式典には、フランス人だけが参加することを望んでいたからだ。

こうして、残った僧侶はわずか5人となった。

ブラージは5人の修道士を一人ずつ、修道院長の書齋に呼び出した。彼はそれぞれに同じ話を繰り返した。すなわち、教皇クレメンスとフランス国王フィリップの共同命令により、ゲートストーンをイギリス軍に対する武器として利用するよう命じられた、という話だ。そして最後に、クレシーからイギリス軍を追い出すのを手伝ってくれるかどうかを、各修道士に尋ねた。

リストに載っていた5人の修道士のうち、クロディウスとグレヴィルはブラージの門石の修復を手伝うことに同意したが、その報酬として修道院の地下墓地の監督官候補としての職務再配置を強く示唆した。彼らはイヴァンとオディーノの地位を望んでいた。ブラージは門石の修復を手伝ってもらった後にのみ、彼らの職務再配置に同意した。残りの3人の修道士のうち、グレイト修道士は協力にあまり乗り気ではなかったが、ブラージは軽く肘でつつき、鋭い目で脅し、あっという間に彼を説得した。残りの2人の修道士はブラージへの協力を露骨に拒否し、門石を乱せば恐ろしい結果を招くと警告した。ブラージは彼らの頑固な拒否に失望し、書齋から追い出したが、開いたドアの外に立っていたボーン大尉にさりげなく頷いた。その結果、ボーンは2人の修道士を田舎に連れて行き、そこで休ませた。

ヴォーニグ修道院長、彼らの唇は土で永久に塞がれていた。

ブラージにとってそれは驚くべきことであり、まるで不可能と思われたことを成し遂げたかのような気分だった。

彼はたった3つの命を犠牲にして、ガーディアン修道院とその守護された門石を掌握し、3人の上級修道士を味方につけた。その間ずっと、彼は自分の意図を隠し通した。

その後数日間、ブラージは修道院長の書齋に引きこもり、長年保管されてきた修道院の写本や、外典のアーカイブから取り出した破れたページを丹念に調べた。

そして修道院の大聖堂の設計図。イギリス軍をフランスから追い出すというより大きな使命に没頭していたブラージは、修道院に住む修道士や従者たちが、ボーンのますます厳しくなる要塞化に順応しながらも、日々のルーティンを続けるように気を配った。

雰囲気のようなもの。

～\*～

修道院の厩舎の向こうで、革のような顔をした修道士が静かに瞑想していた。長年厩舎の管理人を務めてきたため、彼の容姿はすっかりやつれていた。もし僧衣を着ていなければ、ただの農夫に見えたかもしれない。薄い茶色の髪はほとんど残っておらず、頭頂部には、暑い夏の屋外での仕事を何度も繰り返した痕跡として、茶色の斑点が点々と残っていた。フェストノー修道士は上級修道士であり、下級評議会のメンバーだった。厩舎と馬は彼の管理下にあり、ガルディアン修道院とオルレアン町の郵便局の間で定期的に郵便物を運ぶ修道院の少年修道士たちも同様だった。

鍛冶屋の手を細くローブをまとった腰に当て、フェストノーは衰えゆく病的な太陽が、硬い暗い地平線の向こうに消えていくのを眺めていた。頭上では、夕暮れの薄明かりが、高く広がる雲を色とりどりに染め上げ、まるで天上の炎のように揺らめいていた。夕暮れの冷たい空気の中、馬の息遣いが静寂を破った。フェストノーは腕を下ろし、ため息をつき、厩舎の正面へと足早に歩み寄った。彼は日没の数時間前に郵便物が届くことを期待していたのだ。

建物の角を曲がったとき、司祭はランタンを持ったローブ姿の人物を見た。修道院の北門から厩舎に近づくにつれ、その影は高く舞い上がった。フェストノーに近づくと、その影は「郵便配達を妨げているものは何だ？」と叫んだ。フェストノーは逆に質問で返した。「私の使い走りを見かけませんでしたか？」「確かに、それからしばらく経って、正門でグレイト修道士とミゲル少年と一緒にいた。私は集めた彼はもう厩舎にいるはずだ。」

フェストノーは修道院の正面近くに影を見つけた。蹄の音が響き、その影は慌ただしく距離を縮めていった。「兵士があちこちにいる」と、影のような僧侶はランタンを下げながら不満を漏らした。彼はフェストノーの傍らに立ち止まり、近づいてくる聖職者の少年に向き直った。「奴らは私を長い間門前で足止めした。フェストノー、今言っておくが、この出来事には見た目以上の何かがある。善意を貫くために軍隊を必要とする修道院などあるだろうか？」フェストノーは両手を腰に当て、駆け抜ける従者を睨みつけた。

使者は馬の手綱を引いた。フェストノーは、頭頂部を剃った若者が馬から降りると、手綱を握った。「暗闇の中で馬の世話をしなければならないのだ！遅刻の理由を今すぐ説明しろ！」フェストノーは彼を叱責した。従者は頭を下げて告白した。「お許しください、修道士。私は馬の世話をします、修道士、

ご希望であれば、郵便袋を正門の近くに落としてしまったので、探さなければなりませんでした。」

「半日も？」フェストノーは馬を厩舎に連れて行きながら尋ねた。そして立ち止まり、くると振り返った。「なぜ馬は私に文句を言うんだ？また乱暴に乗ったのか、坊主？」

再び使者は一礼した。「修道士様、申し訳ありません。ご存じのように、日没前に到着するのが最善だと判断いたしました。アヴィニオンからの使者も到着が遅れたため、私もオルレアンを遅い時間に出発しました。とはいえ、正門で馬に水を飲ませておきました。」

そして彼女はオルレアンではほんの少ししか食事を与えられなかった。」

「なるほど。」フェストノーは馬の手綱を繋ぎ柱のあたりで叩いた。もう一人の僧侶は明かりを照らすためにランタンを持ち上げた。フェストノーは続けた。「君の遅刻については、君が夜明けと同時に私に報告するように。厩舎の徹底的な清掃が必要だ。」

「承知いたしました、修道士様。」

フェストノーは手綱を軽く引っ張って結び目を確認し、馬の脇腹を軽く叩いた。それから革製の郵便袋のストラップを緩め、馬から外すと、それをもう一人の修道士に投げ渡した。「これが君の郵便物だ。ランタンを貸してくれ。」二人は交換した。

フェストノーは背を向け、ランタンを高い柱のフックの方へ持ち上げた。

「他に何かご用でしょうか、修道士様？」と使者は尋ねた。

「はい」と司祭はランタンをいじりながら、声を張り上げて答えた。

「私が持っています！」もう一人の僧侶が不満を漏らした。「何をしているんだ？待ってくれ！」

フェストノーが振り返ると、兵士が郵便袋を肩に担ぎ、その鞆を持って厩舎から出て行くところだった。フェストノーは「私の命令はあなたに関係ありません、神父様。単なる郵便のやり取りです」と答えた。

フェストノーと従者は、修道士が厩舎から飛び出して、兵士「誰の命令だ？持ってこい！待て！」

フェストノーは手を振って使者を呼び寄せた。彼は蹄を上げた。

彼は自分の馬たちの様子の一つ一つを確認しながら、従者にささやいた。「よく聞け。お前にもう一つ頼みたいことがある。今晚は厩舎の屋根裏部屋に隠れている。衛兵には姿を現すな。夜明け前にアヴィニオンへ出発するのだ。」

「確かに、修道士様。」

「あなたは、教皇陛下に即答が必要な非常に重要な手紙を届けなければなりません。何としても、教皇陛下が手紙を読まれるまで、その執務室に留まってください。必要なことは何でもしてください。ただし、教皇陛下の前では、自分の立場をわきまえてください。集まりましたか？」

「はい、修道士様。どんな手段を使っても、敬意をもってお引き受けいたします。」青年は軽く頭を下げた。

「そして、書面であれ口頭であれ、返事なしに戻ってくることは期待していません。」

「よろしい」とフェストノーは言った。「明日の朝戻ってきますので、馬に乗る準備をしておいてください」

風よ。今回はヴォーニグ修道院長の馬に乗るのだ。」

使者はその種牡馬の評判を知っていたので、微笑んだ。

「さあ、上へ行きなさい。」司祭は従者を梁の上へと手招きし、ランタンを回収すると、北側の修道院門へと戻っていった。

夜が更け、修道院の寮の修道士や従者のほとんどが就寝していた。しかし、フェストノーの部屋では、油ランプが古風な机を照らし、その上には教皇宛の羊皮紙が置かれていた。フェストノーは署名を書き、羽根ペンをインク壺に差し込み、インクを乾かした。彼は、ブラージュがガルディアンに到着してからの出来事を詳述した手紙に目を通した。手紙の目的は明白だった。教皇クレメンスに、ヴォーニグ修道院長の後任としてアヴィニョンから枢機卿を任命したかどうかを尋ねることだった。彼はクレメンスに、最悪の事態を恐れていると告白した。つまり、修道院が守っている「聖遺物」の存在が、公会議の関係者以外の人物に知られてしまったのではないかということだ。フェストノーは手紙を丁寧に折りたたんだ。彼は油ランプでナイフを熱し、蠟の塊の角を切り取って、溶けた蠟で手紙を封印した。彼は封印を乾かした。

突然、オイルランプがちらついた。手に持っていた手紙がひらひらと舞った。冷たい空気が部屋を満たしたように感じた。フェストノーは視線を向け、固く閉ざされた窓を確認した。不自然な寒気がして、彼は咳をした。そして、自分の息に紛れもない白い霧が立ち上るのを見た。司祭は机から飛び上がり、くると向きを変え、薄暗い部屋の隅々まで彼女を探し回った。

しかし、彼は遠くの隅に立つ人影を見つけただけだった。彼は脇に退き、油ランプの光が影を照らし、その影のような姿を浮かび上がらせた。彼の骨は溶け、燃えるタールの川が流れ込むように恐怖が彼を襲った。石の精霊が彼の前に立ち、完全に裸で、光り輝く黒い目、長い髪を持ち、彼のしなやかな魂にニヤリと笑っていた。司祭は、修道院のすべての修道士が知っているように、彼女を知っていた。何世紀も前から存在する、人を悩ませる悪魔であり姦淫者――サキュバスの女王であり、

修道院大聖堂のテラスに並ぶ、あらゆるグロテスクな像の邪悪な母なる源。

「だめだ！」フェストノーは手紙を背中に押しやった。

「さあ、聖なる人よ。私はあなたを大いに喜ばせたではないか？」ルシファエルは千人の女性たちの合唱隊の中でそう唱えた。

「お願いですから、私とお別れしてください。」

「あら、でもそれはできませんわ、旦那様」と彼女は冷笑した。

「私は神に身を捧げたのです」とフェストノーは支離滅裂に呟いた。修道院の多くの修道士と同様に、フェストノー自身も何年も前に大聖堂の頂上に翼のある像を建てられていた。

「それがあなたの言う神なの？」彼女は近づきながら皮肉っぽく尋ねた。  
「彼はあなたの主であり王だ。去れ、女の亡霊よ！」

ルシファエルは彼の前に立ち止まり、両手を後ろで組んで、何食わぬ顔で尋ねた。「フェストノー、この葉っぱのどこを私から隠そうとしているの？」

司祭は凍りついたように立ち尽くし、震えていた。「神の名において、この聖なる地から立ち去れ。」

彼女は隠された手紙に興味があるかのように彼の周りをうろつき、フェストノーは彼はランプの光に照らされた彼女の豊かな胸をじっと見つめていた。

「お気に召しましたか、殿？ご満足いただけましたか？」彼女は顔を上げずに誘惑的な囁き声で尋ねた。フェストノーは目をそらし、「聖なるもの全てにかけて、悪魔の娼婦よ、去れ！」と叫んだ。

彼女は立ち上がり、「出て行け？私を呼び出す手紙を書いておいて、私に出て行けと言うの？」と問いかけた。彼女の唇にいたずらっぽい笑みが浮かび、手紙はたちまち炎に包まれた。

彼は慌てて手を引っ込めると、紙はもろい灰の四角い塊となって床に舞い落ちた。

「さて、あれはそんなに威圧的だった？それとも恐ろしいことだった？」彼女は彼の肩に腕を軽く回しながら尋ねた。彼は身をよじってドアに駆け寄ったが、ドアは開かなかった。彼は拳でドアを叩き、叫ぼうとしたが、彼女が黒く塗られた指を振ると、彼の声は途絶えた。彼は再びドアを叩いたが、部屋中に音は響かなかった。

「あなたが最後に私の肉を味わってから、幾季節も経ちました。今もなお、あなたの腰に燃える渴望を感じています。しかし、私はあなたをその渴望の苦しみから救ってあげましょう。ベッドに横になりなさい。ただし、私があなたの下に横たわることはないということを覚えておいてください。」彼女は手を振り、彼の声を返した。

「そんなことはしない！」彼はそう吐き捨て、ドアと壁の間の隅に後ずさりした。彼女はそっと部屋を横切り、彼を隅から連れ出し、ベッドの方へ導きながら、ささやくように慰めた。「もう一度、あなたの種を貸してください、聖人よ。そうすれば、あなたに立ち去るように命じましょう。」

フェストノーは身を引いて、背中を壁に押し付けた。ルシファエルは彼を机とベッドの間に追い詰めた。彼女は彼の顔に近づき、「あなたはまだ気概をお持ちですね、元気な聖人様。そして、私はあなたの目にはふさわしくないのですか？」と尋ねた。彼女は彼のローブのしわを整え、満足げな笑みを浮かべながら、彼を見下ろした。

「二度としない」と彼は彼女に言った。二人の顔の間の狭い空間で、フェストノーは彼の額と胴体に触れて十字を切った。ルシファエルは後ろに身を引いた。彼女の黒い目はギラギラと光っていた。彼女は司祭の顎の下をつかんだ。彼女が話すと、口の中に犬のような切歯ができた。「私の忍耐は限界です。許可を求めているのは、

あなたはそれを与えようと思っている。それを選択と勘違いしてはいけない——私が与えるのはただ尊厳だけだ  
あなた。"

「それなのに、なぜ作り続けるのですか？ それらはすべて死んでいます。太陽にさらされ、石になってしまったのです。」

彼女はくすくす笑った。「何千人もの人が死ぬことで、何千人もの人が生き延びる。それが人生と死。お前は欲望と罪悪感以外に何を知っているというのだ？

「お前たちのグロテスク像は死んだ！全員だ！大聖堂の頂上に立つ、命のない彫像に過ぎない！」

彼女は彼の目を見つめた。「もう無駄話は十分よ、聖人様。種を貸してくださるの？それともお断り？」

「あなたは裁きの場に立つことになるだろう——」

彼女は黒い爪を振って彼の言葉を遮り、再び彼の声を奪った。彼は振り向かそうともがいたが、彼女から離れることができなかった。

彼女は眉をひそめ、黒い瞳を細めた。「お望み通りに。最初からあなたの同意など必要と  
していませんでした。」彼女は指を彼の顔に滑らせ、彼の心の奥底に触れた。

司祭は身を硬くして震え、大きく見開かれ涙ぐんだ目は、震える手が机の上の蠟で汚れた刃に伸びるのをただ見つめるしかなかった。「確かに、我が愛する聖人よ」ルシファエルは恐怖に震えながら言った。「お前は私のものを私に引き渡さなければならない。それを手に取り、使いなさい。私は追放され彷徨う神であり、今、お前に命令を下すのだ。」

彼女は一度に何人も女性のようになり、その声は一言ごとにオクターブずつ低くなった。「悪魔の神犬の放浪者ほど邪悪な者はいない」

突然、彼女の頭はパチパチという音を立てて歪み、腐ったジャッカルの頭へと姿を変えた。新しい鼻面には、皮膚が剥がれ落ち、穴だらけの骨がむき出しになっていた。彼女の頭からは腐敗臭が立ち上り、部屋の空気を台無しにした。それから彼女は彼の肩をつかみ、耳元に顔を近づけ、ため息をつきながら囁いた。「——私が。」フェストノーは彼の手がナイフを持ち上げるのを見ていた。

ルシファエルは胸を撫でながら、震える刃が司祭に近づいてくるのを見て、好奇心旺盛な犬のように首を傾げた。

「聖なる人よ、安らかに眠ってください」と彼女は動物の息が詰まるような悪臭を放ちながら彼を慰めた。「そうすれば、私があなたを人間の燃えるような苦痛から解放できるでしょう。」

ランプの芯は、ほとんど空になった容器から最後の油滴を吸い上げ、その炎は、まるで激しい炎の舞踏に身を投じているかのように、不規則に揺れ動き、容赦なく迫りくる闇に抗い、自らの命を繋ぎ止めようとしていた。

修道院の寮の外、中庭全体を見渡しても、司祭の宿舎の狭い窓から漏れるかすかな脈動する光に気づいた兵士はいなかった。誰も。

薄れゆく光と、次第に暗くなっていく部屋が見えた。安らかな眠りから目を覚ます僧侶はいなかった。時は流れ、夜はゆっくりと消えていった。

～\*～

夜明け前、悲痛な叫び声が寮を揺り動かし、兵士と眠そうな目をした修道士たちが次々と廊下を流れてフェストノーの部屋へと向かった。彼らはフェストノーの独房に押し入ると、部屋はひっくり返った家具、粉々に砕かれた私物、そして雪のように床や家具を覆う引き裂かれた羊皮紙で散らばっていた。修道士たちが部屋に入った時と同じくらい慌てて逃げ出したのは、何百枚もの羊皮紙のせいではなかった。また、呆然とした兵士たちが後ずさりしたのも、部屋の乱雑さのせいではなかった。壁と床が血でべっとりと飛び散り、鉄のような匂いが部屋中に充満していたからだった。

彼らの前には、泣きじゃくるフェストノーが部屋の隅に座り、ひっくり返ったベッドに横たわり、ローブをまとった膝の上には凝血で固まった木槌を握っていた。もう一方の生気のない手はベッドの縁に磔にされ、腫れ上がった手のひらから刃が突き出ていた。司祭は戸口に群衆がいることに気づき、膝をついて、手のひらとベッドに刃をさらに深く打ち込み、イエスの聖書の一節を叫んだ。

磔刑。額から汗が飛び散り、虚ろな目つきと白目が狂犬のように焦点の定まらない視線で部屋中をさまよった。兵士たちがハンマーを振り回す彼の腕を止めようと駆け寄ったが、彼は司祭を救おうとする兵士の一人の顔面を殴りつけた。押さえつけられ、息を切らしながらフェストノーは倒れ、兵士たちは磔にされた彼の手を解放した。

ああ、フェストノーはその日に亡くなった。そして彼の死後、埋葬の準備中に、数人の修道士仲間が、彼が自分の命だけでなく、もっと多くの命をその刃で奪っていたことを知った。

手。彼らには、司祭の狂気の進行の中で、彼が自ら去勢したことは明らかだった。しかし、その後の徹底的な私的搜索では何も見つからなかった。このことを知ったブラージは、自傷行為を知った修道士たちに留まるよう命じた。

静かにフェストノーの狂気を床や壁から拭き取り、故修道士の部屋を封印する寮の部屋に無期限で収容されることになった。こうして、布にくるまれたフェストノー修道士は、かつて故ヴォーニヒ修道院長のために用意されていた、壮麗で装飾の行き届いた地下墓地の最新の住人となった。そしてブラージにとって幸運なことに、この恐ろしい出来事は、彼がまだ抱いていたより重大な目的から、そこに住む修道士たちの注意をそらすのに大いに役立った。

【第5章終了】



この文学作品は、

エドガー・アラン・ポー（1809年 - 1849年）

—彼の遺志が私たち一人ひとりの心の中で生き続けることを願います—



~[GothicNovel.Org](https://www.gothicnovel.org)~